

クリスマスとサンタとトナカイ

天堂まや

のんびりのんびり。

ちらちらと粉雪の舞う聖なる夜。

荷物を袋いっぱい詰めたサンタはよいしょと腰を上げました。

「さあて、今年もそろそろ行くとするかな。」

サンタがまず最初に出掛けたのは、長年の相棒・トナカイの家でした。

「おお〜い。トナカイ、時間じゃぞ〜。」

しかし返ってきたのは慌てたようなトナカイの声。

毎年のことですが、あれこれ悩みすぎる彼は、

困ったことにまだ持っていくプレゼントを決めあぐねていたようです。

「待ってください〜。今荷物詰めているんですよ。」

呆れるサンタに、トナカイは笑ってこたつを勧めました。

「まあまあ。夜も長いし、お茶でも飲んでいきましょうよ。」

確かに聖夜はまだ始まったばかりです。

サンタも少しくらいのんびりしてもいいかもしれません。

はらはらと舞う粉雪を見上げながら、トナカイの出してくれたお茶で奇跡を約束してくれる夜をお祝いしました。

「Merry Christmas!!」

そーっとそーっと。

ジ...。
ジリジリジリジリジリリリーン。

「ふお...」
高らかに鳴り響く目覚まし時計の音に、ベッドの中からサンタさんがむくりと起き上がりました。

「おや。もうこんな時間かの」
時計の針が指し示す時間に、寝ぼすけなサンタさんも慌てます。

ごしゅごしゅごしゅ。
それでもとりあえず、時間をかけて丁寧に歯を磨きます。

居間のストーブには、もう火が入っていました。シューシューとやかんが音を立てています。
トナカイが、サンタさんのために用意してくれたのでしょう。

「おお、トナカイ。待たせたの」
「用意できましたか？」
「もちろん、万全じゃとも！」
「じゃあ、行きましょうか！」
世界一早いトナカイの足が、サンタさんを世界中へ運びます。
寒い寒い雪の中も、ふたりは子供たちの笑い声を聞くために走り回りました。

「メリー・クリスマス！」
顔なじみのスノーマンが
二人の横を滑り抜けていきました。
彼は、これから麓まで降りて行って子供たちを喜ばせるのでしょう。
去って行く後ろ姿にトナカイが声をかけ、
「メリー・クリスマス！」
「お前さんも、がんばれよ」
サンタさんも激励を手向けます。

木々の上に宿る明かりに導かれて、サンタさんとトナカイは闇夜を走り続けます。

時には、煙突に登ることが難しいこともあります...。
ふたりは、連係プレーで乗り越えます。

「行きますよー」

「そーっと、そーっと、じゃぞ」

...トナカイの釣りの腕を知っているサンタさんは
少し怖いみたいです。

大変なことも多い配達ですが、サンタさんは挫けません。
袋の中にたくさんたくさん詰めたプレゼントを、
ベッドの脇に吊るした靴下の中に丁寧にに入れてあげます。

「さて、トナカイや。もうひとつ走り頼むぞい」

「任せてください！

飛ばしますからね。ちゃんと掴っててくださいよ！」

「ほっほっほー」

サンタさんとトナカイが目指す、次の家はあなたの家かもしれませんね。
プレゼントの願いは決まりましたか？
枕元に靴下を飾ることをお忘れなく！
そして、靴下はプレゼントが入る大きさにしなければなりませんよ！
サンタさんが困ってしまいますからね。

どこか遠くから、鈴の音が聞こえてきませんか？

きっと、ふたりはあなたのすぐ近くまで来ていますよ。

『幸福』というプレゼントを、たくさんたくさん詰め込んで、ね。

奇跡はすぐそばに。

「おお。来ておる、来ておる」

サンタさんは、嬉しそうに笑いながらメールを一通ずつ開いていきました。世界中の子供たちから、今年のクリスマス・プレゼントのおねだりが届いたのです。

宛先のないメールは本来ならどこにも届くはずがありません。機械は郵便屋さんのように親切ではないからです。だけど本当に真剣な願いだけは、なぜかサンタさんのもとに届くのです。

これもクリスマスの奇跡のひとつなのでしょう。

「サンタさーん、準備は出来ましたか〜？」

間延びした声が、サンタさん呼びます。長年の相棒のトナカイでした。

「ほいほい。今行くよ」

袋にぎゅっと詰めたプレゼントを持って、サンタさんはトナカイを出迎えました。

「メリー・クリスマス！」

「メリー・クリスマス！」

新品の鈴をつけたトナカイも、にこにこ笑っています。今年のサンタさんからのプレゼントはこの鈴だったのです。

綺麗な綺麗な鈴が、トナカイはお気に入りでした。

「さて、行こうかね」

「みんな待ってますからね！」

外は、一面の銀世界でした。

トナカイの曳くそりに乗って、サンタさんは雪の世界に飛び出しました。

「綺麗だねえ」

しんしんと降り続ける雪を、町の明かりがそっと照らし出しています。明るく、優しい明かりは、サンタさんとトナカイから寒さを取り除いてくれました。

「まずはあの家からじゃ」

「しっかり掴まって下さいね！」

トナカイは、遠く遠く先に見える屋根に向かって走り出しました。一晩で世界中を駆け抜ける彼の足は、それはそれは速いのです。

ベッドの横に下げた靴下に、プレゼントが入っていることに気付いたのでしょう。部屋の明かりが点き、嬉しそうな声が窓の外にまで聞こえてきました。

「よかったですね」

「そうじゃな」

喜びの声が、ふたりにとっての元気の素なのです。

サンタさんとトナカイの、配達の旅はまだまだ続きます。

あなたのもとにも、ひょっとするとプレゼントが届くかもしれませんね。

奇跡を呼ぶほどの真剣な願いなら、きっとサンタさんはかなえてくれるはず。

なにが一番大事かって？

それはきっと「信じること」ですよ。サンタさんを、そして自分を、ね。

ああそうだ。
最後に一つ。

目印の靴下を、どうぞお忘れなく。

おや、どこからか鈴の音が聞こえてきませんか？
幸福の配達人は、意外に近くにいるんだと思いますよ。
きっとね。

---*-----

「今年は遅いですねえ」

「わしは待ちくたびれた」

---*-----

「ちょっと休憩しましょうか」

「そうなの」

---*-----

「サンタさん、トナカイさん。起きてくださいよ～」

---*-----

「サンタさん、外見てくださいよ！」

「おお、やっと冬の精たちが来たか」

---*-----

「あ、サンタさん、今年はその木みたいですよ！」

---*-----

「おお、これがないとクリスマスに夜中ソリを走らせることができんからなあ」

「流れ星のランプはぼくたちの行く道を照らしてくれますからね」

---*-----

「さて行くのでしょうか」

「はい、がんばりましょう！ みんな待ってますよ」

---*-----

「うわあ、大きな靴下だなあ！」

---*-----

「ふおっふおっふおっ。よっぽど楽しみにしとったんじゃないなあ。
ほれ、プレゼントじゃ」

「喜んでくれるといいですね」

「そうじゃな」

---*-----

「サンタさん、そろそろ次の町へ行きますよ！」

---*-----

「朝露が落ちる前にみんな配らなきゃいけませんからね！」

「トナカイ、お前の足にかかっているぞ」

「任せてください！」

---*-----

「みなさんの町にも、ぼくたちが行きますからね！
いい子で待っていてくださいね！」

---*-----

